

『神の恵みの備えがある』 ヨナ3:1-

3:1 時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、

3:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。

3:3 そこでヨナは主の言葉に従い、立って、ニネベに行った。ニネベは非常に大きな町であって、これを行きめぐするには、三日を要するほどであった。

3:4 ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、「四十日を経たらニネベは滅びる」と言った。

3:5 そこでニネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。

3:6 このうわさがニネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。

...

3:10 神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

4:1 ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、

4:2 主に祈って言った、「主よ、わたしがなご国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。

4:3 それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとっては、生きるよりも死ぬ方がまだからです」。

4:4 主は言われた、「あなたの怒るのは、よいことであろうか」。

●序論

このヨナ書はだれの手による執筆か。これは預言者ヨナ自身の体験をヨナ自身が記した書物です。彼は、「救いは神にある」という経験を経て、今日神さまの言葉に応え立ち上がって、アッシリアの首都ニネベに出て行ったことを記しています。

3:1 時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、

3:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。

3:3 そこでヨナは主の言葉に従い、立って、ニネベに行った。

自分が愛するイスラエルの敵国へ神の言葉を伝える。

異邦人の使徒と呼ばれたパウロに重ねて見ることができます。かつて迫害者であり、純粋なユダヤ主義に身を投じて、キリスト者たちを迫害していた彼でしたが、救われて一転、キリストを信じ、世界中に、そしてローマに福音を伝える使徒となっていきました。

ローマ15:16（新改訳）それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。

「神から恵みをいただいている」告白するパウロは、ゴリゴリのユダヤ主義から変えられたのでした。同様にこのヨナ書では、神の異邦人たちへの思いが語られます。

4:11 ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」。

●本論

Ⅰ. ヨナと二ネベの悔い改め

3:4 ヨナはその町にはいり、初め一日路を行きめぐって呼ばわり、「四十日を経たら二ネベは滅びる」と言った。

彼が伝えた内容は、神の御手による二ネベの町の滅びでした。

敵国でしたが、ヨナには、臆するところはありませんでした。

なぜなら、彼ははっきりとした神体験を通ったばかりだからです。

そこで、信じられないことが起こったのです。

3:5 そこで二ネベの人々は神を信じ、断食をふれ、大きい者から小さい者まで荒布を着た。

3:6 このうわさが二ネベの王に達すると、彼はその王座から立ち上がり、朝服を脱ぎ、荒布をまとい、灰の中に座した。

二ネベの人たちは真実に心を砕きへりくだって悔い改めました。

二ネベにいたアッシリアの王言葉は印象的です。

3:9 あるいは神はみ心をかえ、その激しい怒りをやめて、われわれを滅ぼされないかもしれない。だれがそれを知るだろう」。

ただ、異国の悪王と呼ばれる人が、神の憐れみにすがる、ありさまこそ「不思議に見える」神さまの備えられた出来事です。ヨナを通して語られた神さまの言葉が、彼らをそこまで変えた、他に理由はありません。

わたしたちは神さまから、神さまの言葉をいただいています。それを祈りつつ、神さま信頼しつつ、そのままを語ることです。そのあとの御業は神さまがなさってくださいと期待できるのです。

Ⅱ. ヨナと二ネベの救い

3:10 神は彼らのなすところ、その悪い道を離れたのを見られ、彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。

二ネベの町の人たちは、悪から立ち返る努力をした、つまり悔い改めたから自然、滅びを免れた…というわけではありません。

そのありさまを御覧になる生ける神さまがおられて、「彼らの上に下そうと言われた災を思いかえして、これをおやめになった。」のです。

神が、この二ネベを滅びから救われたのです。

しかし、「思い直される神」がいて、良かったね…と、ハッピーエンドとはなりません。その神さまに不満を爆発させたのが、あのヨナでした。

4:1 ところがヨナはこれを非常に不快として、激しく怒り、

4:2 主に祈って言った、「主よ、わたしがなお国におりました時、この事を申したではありませんか。それでこそわたしは、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。

神さまが我慢ならぬヨナの姿は、神さまにさえ「間違っている、こんなこと間違っている」と叫んでいるような言葉です。

だから死なせてくれ、とまで叫んでいます。

4:3 それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。わたしにとっては、生きるよりも死ぬ方がましだからです」。

彼は、いつの間にか、二ネベの滅びを望むようになっていて、またイスラエルの敵だから当然、そうなってかまわないという断罪者となっていたのかもしれませんが。

その彼にとっては、神こそ我慢のならない存在だと訴えているようです。

そんな彼に神さまは、語られます。

4:4 主は言われた、「あなたの怒るのは、よいことであろうか」。

(新改訳) 「お前は怒るが、それは正しいことか」。

イエスさまが放蕩息子のたとえを語られたとき、そこにはさんざんな放蕩の末悔い改めて帰ってきた息子と、その息子を喜び愛を持って迎える父の姿がありました。それは新しい着物を着せ、宴会を開くほどの喜びようです。一方で、そこにはもう一人の息子、兄の姿が描かれていました。

ルカ15:28 兄はおこって家にはいろいろとしなかった

その兄をなだめに父はなだめに出てくると、兄はその不満をぶちまけます。

神の憐れみ深さは、わたしたちの思いや想像を超えます。だからわたしたちは、自分の方がわかっているのに、正しいのに！と思うかもしれません。

そんなとき、深呼吸して神さまの言葉に耳を傾けていただきたいのです。

(新改訳) 「お前は怒るが、それは正しいことか」。

Ⅲ. ヨナと神のなだめ

ヨナは、いまだ神さまに「アーメン」ということはできないでいました。

「町のなりゆきを見きわめよう」と彼は、二ネベの東の方に小屋を建てて町の様子を見えています。それは二ネベの町の滅びを望み、神はヨナの怒りに答えるべきだという、そんなこわばった思いが見えます。

そこに神さまはいくつかの備えをもって、ヨナの心に触れようとされました。

4:6 時に主なる神は、ヨナを暑さの苦痛から救うために、とうごまを備えて、それを育て、ヨナの頭の上に日陰を設けた。ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ。

4:7 ところが神は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまをかませられたので、それは枯れた。

4:8 やがて太陽が出たとき、神が暑い東風を備え、また太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱りはて、死ぬことを願って言った、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはましだ」。

ヨナはいつも自分を中心に、神さまがどこまで自分の望み通りにしてくれるか…で神さまを測っていました。そんな思いをとうごまという一本の木を備えることで、明らかにされたのです。 神さまとの対話は、印象的です。

新改訳) 4:9 すると、神はヨナに仰せられた。「このとうごまのために、あなたは当然のこのように怒るのか。」ヨナは言った。「私が死ぬほど怒るのは当然のことです。」

ヨナの中では、自分のための神、自分のためのすべて、だから、自分の怒りは正当なこ

ととなっていました。 そんな彼に神の言葉は大切な気づきへと導きます。

4:10 主は言われた、「あなたは労せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。

4:11 ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜とのいるこの大きな町ニネベを、惜しまないでいられようか」。

神さまは、わたしたちの心が「当然」と思うような正義に対して、「あわれみ」という神の思いを示し、気づきを与えてくださいます。

あの放蕩息子の兄に向けて、父はこう語りました。。

ルカ15:31-32 すると父は言った、『子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである』」。

そして神の思いはここにもあらわされています。

ヨハネ3:16 神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。

そしてイエス様ご自身、十字架上でこう祈られています。

ルカ23:34 「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。

ここに「右左をわきまえない人々」に心を向けられる神さまの心がわかります。

結論として)

今は、どんどん悪い時代のエスカレーションが進んでいるかのように思います。「敵だ」「悪だ」というような存在が、事実自分と自分の周囲を蹂躪するような状況が世界中のあちらこちらで、そして身近で起こっています。

「敵」や「悪意」の中であって、わたしたちが持つべき力、持つべき違いは何でしょうか。

イエス・キリストの福音です。わたしをも選び、救い、そして神の子としてくださった…真実な神の愛です。すべて神さまからの一方的な恵みです。

気づきを与え、諭しを与えてくださる神さまに目を向け、葛藤しつつも、聖霊に導かれ、主の思いを知る歩みを進めていただければと願います。